

第 5 章 利 活 用



田んぼの楽校



環境学習



5.1 利活用の実施状況

■年間スケジュール

アザメの瀬については、NPO 法人アザメの会を中心として、地元小学校や大学と連携し、環境学習や堤返しなどの利活用が行われている。

右表に示すように、稲作の一連の作業を体験してもらう環境学習や自然環境教室などの行事が定期的に行われており、年間を通しての利用があることがわかる。行事としては、小学生などの児童に自然環境や昔ながらの伝統行事を体験してもらう内容が多く、体験型の環境学習を中心とした利活用となっている。

表 5-1 アザメの瀬における年間行事

月	行事
3 月	イダ嵐見学会
6 月	環境学習（田植え）
8 月	アザメの瀬自然環境教室
	環境学習（田の草取り）
10 月	堤返し
11 月	環境学習（稲刈り）
12 月	収穫祭

■利用者数の推移

右図にアザメの瀬における目的別の利用者数の推移を示すが、アザメの瀬は環境学習やアザメの会の活動によって安定的に利用されている。また、国内外の大学や行政、各種団体による視察も多く行われている。

アザメの瀬は、全国でも先行的な事例であり、年間 100～300 人ほどの視察を目的とした来訪者がいる。また、イベントの利用者数の多くを占める環境学習等の行事への年間参加者数は概ね 400～600 人で推移しており、安定的に利用されているといえる。

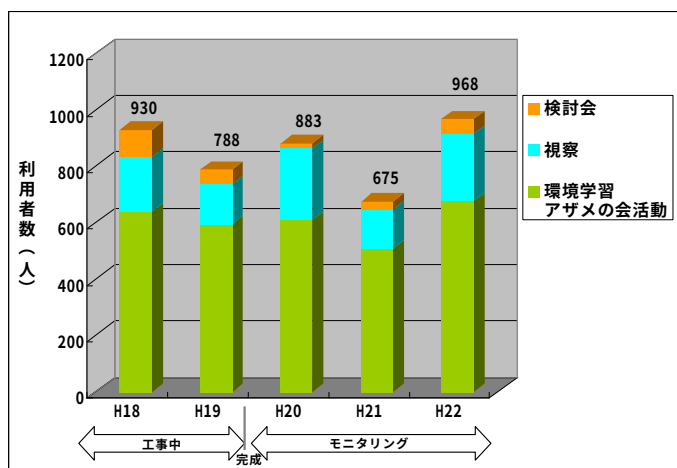


図 5-1 アザメの瀬の目的別利用者数の推移グラフ

※平成 17 年 4 月～平成 22 年 12 月までのもの

また、アザメの瀬はイベント利用だけではなく、モニタリング道路等や環境学習センター周辺での散歩や休息などの日常的な利用がある。平成 21 年度にアザメの瀬で実施された河川空間利用実態調査を基に、アザメの瀬完成後の推計年間利用者数を右図に示すが、概ね 500～600 人の利用があると見込まれる。

アザメの瀬は、環境学習の場であるだけではなく、地元住民の日常的な憩いの場としての利用がなされているといえる。

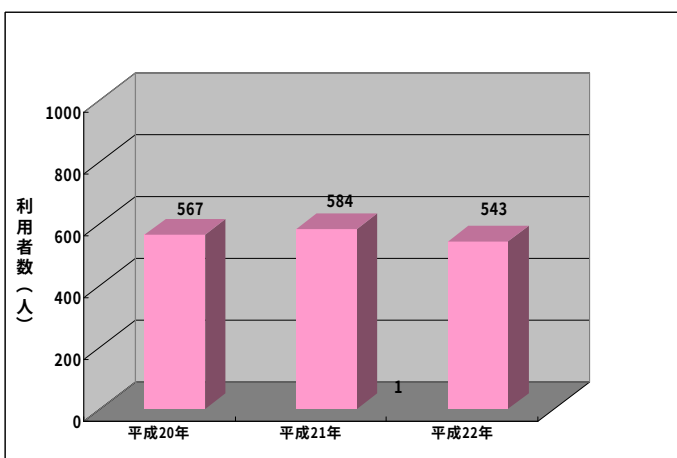


図 5-2 アザメの瀬の推計年間利用者数の推移（河川水辺の国勢調査より）

※推計値は平成 21 年度に実施された河川空間利用実態調査を基に、各年度の天候区分（平成 20～21 年度：和多田、平成 22 年度：唐津）を用いて算出した

5.2 実施内容

アザメの瀬で行われている主な利活用について、以下より述べる。

■環境学習（総合学習の一環として実施）

環境学習は、総合学習の一環として主に地元の唐津市立相知小学校の児童を対象に平成 17 年から継続して実施されている。棚田整備後の平成 18 年以降では、アザメの瀬内の棚田での田植えに始まり、田の草取り、稲刈りまでを行い、収穫祭を行っている。これらの活動は武雄河川事務所とアザメの会とが連携して行っている。

「最初は難色を示されたが、新しく着任した校長先生に楽しそうだなあと言ってもらえた。また、校長が変わったら、アザメの歴史を説明し、理解してもらうようにしたい。」と、当時を知る住民は話す。

今でこそ、総合学習の一環として実施されているが、当初は理解を得るために苦労したという。環境学習前には草刈なども行っており、アザメの会による地道な活動によって成り立っているといえる。



稲作に関する説明に聞き入る児童たち



棚田での田植え（6 月）



田んぼの草取り（8 月）



稲刈り（11 月）



収穫祭での餅つき（12 月）



自分たちで作った餅をほおぼる

■夏休み環境教室（大学と連携して実施）

夏休み環境教室は、アザメの瀬の体験型学習の一環として、主に地元の児童を対象に平成 20 年から継続して実施されている。活動内容はアザメの瀬に生息する魚類や植物、昆虫類などの観察、児童らによる観察結果の発表である。武雄河川事務所とアザメの会、九州大学が連携して行っているが、武雄河川事務所ホームページでの開催告知による効果もあり、佐賀市内や福岡県からの参加者もいるなど好評である。



魚捕りの様子



自然と触れ合う貴重な機会



松浦川で水遊び



大学生による生物の説明



観察で学んだことをまとめる



最後にまとめた内容を発表

■ 伝統行事の継承

堤返し

ため池等を干し上げて、水位を下げることによって水質や池底の浄化等の維持管理を行うことを堤返しと呼ぶ。水位が下がることにより、魚類の捕獲が容易になるため、アザメの会では平成 15 年から児童を招いて魚採りを行っている。その後に振舞われる料理も好評であり、継続して実施されている。



アザメの会主催による伝統行事「堤返し」の様子（アザメ新聞 Vol127 より）。



魚採り



大きな魚が採れました



採った魚を捌く婦人会の方々



採った魚はおいしくいただきます

イダ嵐

春一番が吹くと、イダ（ウグイ）が産卵のために海から川へと遡上を行う現象をこの地域では、イダ嵐と呼ぶ。アザメの会が中心となり、伝統行事としてのイダ嵐の見学会を平成 15 年から実施している。投網講座や会によるイダの料理のもてなしなどを行っており、好評な企画である。



アザメの会主催による伝統行事「イダ嵐」の様子（アザメ新聞 Vol31 より）。



投網講座



仕掛けの様子



採れたウグイ



見学会の最後はイダ料理

■職員研修

近年、河川事業においては河川環境の概念の必要性が増大している。国土交通省においても、河川環境を理解する技術者の育成は必要不可欠である。育成においては、実際に現地を確認した上での実践形式の研修を行うことが有効である。

こういった河川環境に関する実地研修を行う上で、アザメの瀬は以下の点で研修場所として適した場所であるといえる。

- ① アザメの瀬は氾濫原的湿地環境として、ため池やクリークなどの様々な形態の環境を有しており、環境学習に適している。
- ② これまで順応的な自然再生事業として進められており、研修に利用できる多様なデータが豊富にある。
- ③ 多様な種の生息・生育場所として利用されており、環境を学習する多様なメニューを設定できる。
- ④ 独立行政法人 土木研究所 自然共生研究センターとの連携協力体制が構築されており、現場を知る多くのアドバイザーからの助言を得ることが出来る。

そこで、アザメの瀬を河川環境の実地研修場所として活用し、対象者に応じた研修カリキュラム（表 5-2）を構築して研修を実施した。

表 5-2 平成 17 年度に実施された研修カリキュラム

	対象	目的	内容
入門編	2 年目職員	河川環境を知るための現場経験	河川環境のフィールドの基本を実体験
実践編	3 年目～主任職員	本格的な調査経験を通じて、河川環境の基礎を理解	現場経験として植生・魚類の調査を実践
応用編	係長職員	河川環境の理解と実践に向けての応用	整備計画の目標論から体系的に学習、現場経験と河川模型を用いた演習



研修の様子



5.3 地域の取り組みへの反応

前に述べたような地域の取り組みは、各方面で高い評価を受けてきた。

■皇太子殿下のアザメの瀬視察

平成16年4月には、皇太子殿下が「みどりの愛護」の一環として、アザメの瀬をご視察された。

視察に先立ち、武雄河川事務所や地元住民が総出で、展示する魚の捕獲やアザメの瀬周辺などの掃除を行い、皇太子殿下の視察に備えた。見学時には、自然再生事業の説明や魚類の説明などを行った。

※「みどりの愛護」とは、公園緑地の愛護、道路や河川等の愛護を通じて、緑の保護育成等を行う活動のことであり、全国的な集会も開かれている。



行啓を伝える新聞記事（佐賀新聞：平成16年4月25日）



地元住民からの歓迎を受ける皇太子殿下



地元住民からの説明をお聞きになる皇太子殿下



植物についての説明をお聞きになる皇太子殿下



松浦川の魚に興味を示された皇太子殿下

■九州川のワークショップでのグランプリ受賞

九州地方で、河川を活かした地域づくりに取り組む市民団体が活動報告を行う場として「九州川のワークショップ」が開催されている。

NPO 法人アザメの会は、アザメの瀬での活動内容を報告し、平成 18 年に開催された「第 6 回九州川のワークショップ」で入賞するなど高い評価を受けている。また、アザメの瀬完成後の平成 19 年に開催された「第 7 回九州川のワークショップ」ではグランプリを受賞した。子どもたちの環境学習の支援を行っている点などが高く評価されての受賞となった。

このようにアザメの瀬での活動内容は、九州地区でも広く知れ渡っており、地域住民が中心となった活動が評価されている。



九州川のワークショップでのアザメの会のグランプリ受賞を伝える新聞記事。
(佐賀新聞：平成 19 年 12 月 8 日)



ワークショップに向けての練習



ワークショップ参加時の様子



■全国「川の日」ワークショップでの入選

全国規模でも、川の日（7月7日）を記念して、市民団体の活動内容を報告する場として「川の日」ワークショップ」が開催されている。

NPO 法人アザメの会は取り組みを紹介する姿勢を全国的な場にも広げており、「川の日」ワークショップ」へ参加した。平成 18 年に開催された「第 9 回「川の日」ワークショップ」では、53 団体参加の中、入選を果たした。アザメの瀬における個性的な自然再生と伝統行事「堤返し」に子供たちを参加させ、伝統行事の継承を行っているという点が評価された。



ワークショップ参加時の様子



熱のこもった説明を行う大草氏（アザメの会）



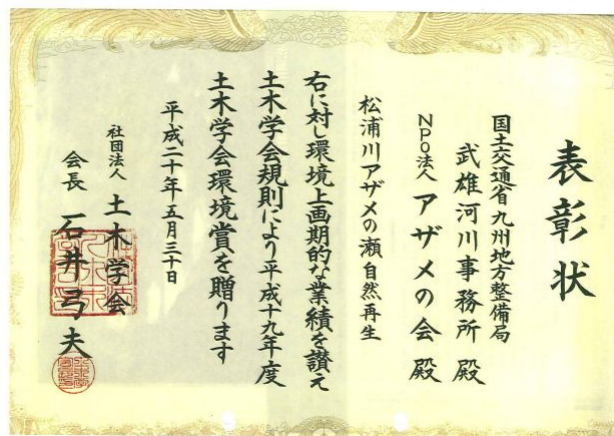
第9回では見事入選を果たす！

■土木学会環境賞の受賞

完成後の平成 20 年には、アザメの瀬が社団法人土木学会の環境賞を受賞している。

土木学会環境賞は、環境の技術分野において画期的な業績をあげた個人や団体への賞であり、アザメの瀬ではNPO 法人アザメの会と武雄河川事務所に贈られた。

河川に湿地帯を造成し、その場を環境学習等に活用している事例は全国的に見ても、先進的であったといえる。また、事業着手当時より回数を重ねた検討会に代表されるように、事業主である国土交通省とアザメの会の連携が高く評価されたといえる。



土木学会環境賞受賞の表彰状



土木学会からのトロフィー



土木学会環境賞受賞の記念撮影



土木学会環境賞受賞を伝える新聞記事
(佐賀新聞：平成 20 年 7 月 5 日)

唐津市教育長表彰

平成 22 年 10 月に NP0 法人アザメの会が、唐津市の教育の振興に貢献した個人及び団体に贈られる唐津市教育長表彰を受賞した。子供たちへの継続的な環境学習の実施が、唐津市の社会教育に貢献したとの評価を受けた。

子供たちの通う小学校とつながりを持つ活動を行ってきた同会にとって、教育の現場からの受賞は非常に価値のあることだといえる。



唐津市教育長表彰受賞の記念撮影

5.4 今後の利活用のあり方

■利活用における課題

アザメの瀬での利活用については、NP0 法人アザメの会が中心となって実施しており、その結果は各方面から高い評価を得てきた。しかしアザメの瀬自然再生事業も平成 13 年の第 1 回検討会から約 10 年弱が経過し、利活用における様々な課題も抱えている。現状での課題は以下に示すとおりである。

課題①：NP0 法人アザメの会の会員の高齢化、参加者の減少

課題②：継続的な小学校との連携

課題③：予算の確保

■今後の方向性

上記の課題に対して、アザメの会では今後の方向性を以下のように考えている。

表 5-3 利活用における課題と今後の方向性

課題	今後の方向性
課題①：NP0 法人アザメの会の会員の高齢化、参加者の減少	・後継者を育成し、バトンタッチを図っていく必要がある。
課題②：小学校の方針に左右される可能性のある「小学校との連携」	・校長先生が交代する際には、アザメの瀬の件に関して引き継ぎを確実にしてもらう。 ・教育委員会に活動内容を説明し、小学校との連携を安定化させる。
課題③：予算の確保	・各方面への PR を行い、予算を確保する。

今後も利活用の内容の中心は環境学習であり、「子供たちの参加」が必要である。小学校との連携を安定化させるためには、教育委員会への説明を行い理解を得ることは有効であると考えられる。

また、子供たちとの交流のためにも、棚田は極めて重要であり、後述する維持管理についても真剣に取り組んでいかなければならない。そのためにも、アザメの瀬周辺住民に活動に取り組んでもらい、NP0 法人アザメの会と一緒に盛り上げていくことが必要である。

上記に挙げたように、利活用の中心である NP0 法人アザメの会では様々な課題を抱えており、今後も新たな課題が出てくる可能性もある。だが、アザメの瀬自然再生事業の根本にあるのは、順応的管理という概念であり、今後も検討会などにより話し合いを続けて解決していこうとする姿勢が基本である。